

「波」(新潮社)2010年10月号

新潮選書

岩村充 『貨幣進化論「成長なき時代」の通貨システム』

北村行伸(経済学者)

「革新的な貨幣の未来予想図」

本書は貨幣や金融の歴史について語りながら、単にその歴史をたどるだけではなく、貨幣という制度の面白さや不思議さがどこにあり、人間がどのように工夫を凝らしてきたかが伝わるように書かれている。

若い読者には貨幣の発生や、流通の仕組み、中央銀行が貨幣を発行するようになった経緯や貨幣の価値をつなぎとめる金本位制、金融政策の原理や貨幣発行競争の意味など、金融の基本を学んでほしい。少し歳を取って自分なりの経験もある読者には、著者の観察や評価、あるいは比喩が文章の端々に出てくる面白さも味わっていただきたい。本書が凡百の類書と違うのは、この著者独特の歴史や制度の解釈にあり、著者がこのテーマについて心血を注いで考え抜いてきたことが読み取れるはずである。

本書の中で著者の最大の関心事は、経済成長も人口成長も停滞してしまうような今後の社会では、これまでのような貨幣制度は通用しなくなるのではないかということである。実体経済の収益率を反映した「自然利子率」がマイナスになり、物価がデフレで低下しても、名目金利である市場金利はマイナスには下げられない。いわゆる「流動性の罠」にはまった状態になると、それ以上金融政策が何もできなくなってしまうという難問である。

しかし、著者は市場金利をマイナスにできるような仕組みを作ればいいのではないかと言う。ゲゼルという学者が考えた銀行券にマイナスの金利に相当するスタンプを貼るというアイデアを紹介し、それは確かに面倒だが、ICカードに記録されている電子マネーになら、マイナスの金利をつけることもそれほど難しくはないと主張している。

著者の話はさらに進んで、そのような機能をもった貨幣を自由競争で選択できるような世界を考えようではないか、そこに貨幣の新しい未来が開けるはずであると結んでいる。

著者のこの革新的で楽観的な見方は次のような確信から来ている。

「貨幣の歴史を辿りながら私が繰り返し感じていたのは、人類とは何と賢い愚者の集まりなのだろうかということです。愚かな賢者たちではありません。賢い愚者たちです。近づく脅威に気がつかず市場という名の船の上で無駄な議論と馬鹿騒ぎを繰り返す愚者の集団なのです。しかし、だから良いのです。…一人一人では間違ふこと

の多い愚者たちも、愚者は愚者なりに試行錯誤を繰り返しているうちに、やがて大きく間違わない答えに到達することができる、そのことを貨幣の歴史は示しています。」

著者は、愚者の論争から自由に飛び立って、その先を見据えているという意味では、数少ない賢者である。新しい時代の貨幣について知りたければ、是非本書を手にとっていただきたい。